

日露関係の中で成立しなかったことの歴史から

——レザノフ使節がもたらした日本人が受け取らなかったロシアの贈り物——

ワジム・クリモフ

はじめに

人間、出来事、品物、収集物、文書館文書は、時が経つとともに、妙な形で、相互にもつれ合う。そのため、時として、研究者にはそれら相互の結び付きを確定することが極めて難しい。侍従ニコライ・ペトロヴィチ・レザノフ（一七六四—一八〇七）を団長とする使節団が、通商関係確立を目指し、長崎（日本）を訪問して、二〇〇年以上が経った。

この間、各国の歴史家により多くの学術論文や研究書が書かれた。だが、その際、主たる注目は、問題の外交面、一九世紀初頭の東アジアにおける国際関係に割かれた。本稿は、幕府の権力代表者への贈り物として日本に運ばれた品物の運命、同様に、レザノフがロシア皇帝や自分の家族、ロシア科学アカデミーのメンバーのために長崎で購入することに成功した物品の運命を確定する試みである。

このテーマで非常に良い刺激になるのが、広島県立歴史博物館で最近【二〇一六年十一月】開かれた展示会である。ここでは、ロシア人が持ち参し日本側が受け取らなかった贈り物が描かれた屏風が展示された。その視覚的描写はこれらの対象物をロシアの博物館のコレクションに探し発見することに役に立つ。本稿をこの作業の始まりとして検討することが可能であり必要である。この目的の達成のためには、文書館文書や文字史料も役に立つ。なによりもこれに関係するのが、使節参加者やナジェ

ジダ号艦長で最初の世界周航の指揮官である海軍少佐イヴァン・フォードロヴィチ・クルーゼンシュテルン（一七七〇—一八四六）指揮下の海軍軍人の日記や報告書である。それでは、当該テーマと関係を持つ文字史料の概観に移ろう。

文書史料の概観

文書館史料そのものの考察が重要であることは言うまでもないが、出来る範囲で、個々のフォンドおよびそれらが創設された経緯の概観を性格付けることも重要である。最初に、N・P・レザノフの「日本遠征と滞在に関する皇帝陛下への上奏書」（露暦一八〇五年六月八日付）

（Отдел рукописей Российской национальной библиотеки. Архив

Бильбасова В.А. и Красковского А.А. Фонд No. 73. Единица хранения 341

【ロシア国立図書館（サンクト・ペテルブルグ）手稿部、V・A・ピリバソフ&A・A・クラエフスキー文書、フォンドNo.73、保存番号341】
について具体的に見ていくことにする。

この手稿は三八枚から成り、内訳は、半分に折った大きさ縦四四×横三五・五cmのロシア製の厚めの紙六枚を三束に綴じたもの、および、報告書の最後に当たる同じ大きさの二枚である。【縦四四cm横三五・五cmの：紙六枚ずつを半分に折ったもの三束：同じ大きさの二枚】とは【六×二】×三＝三二【+最後に同サイズの紙二枚＝計三八枚】の意味】手稿

は、明らかに、ロシア帝国外務省外交文書部の浄書書記のしつかりとした筆跡で書かれたものである。本稿筆者が使用したのは、同省上記文書部で働いていたV・A・ピリバソフが当時入手した写しである。この報告書から次のことが判明する。

レザノフはこの報告書以前に以下のように書いている。

「一八〇四年一〇月一五日付で、長崎港からバタヴィヤに向かったオランダの複数の船に託して、…報告書をお送り申し上げる機会を得ました。それらのさまざまな船でヨーロッパに送るため、私は、その報告書には副本を作成しました。とはいえ、容易に考えられますことは、戦時状況のため、皇帝陛下の御許まで届かなかった可能性です。それに加えまして、報告書そのものは極めて短いものでした。と申しますのは、疑い深い日本政府は、あらかじめ複数の奉行たちに正本を提出しますと、發送用として私に返却されたもの以外は許可しなかつたからです。従いまして、私は、カムチャツカ出港以後のすべての出来事について、ここにご報告申し上げることが私の義務と考えます。」

それより以前レザノフによって送られた報告書については、本稿筆者は今のところ調査出来ていない。上記で引用した報告書の写しは、サンクト・ペテルブルグのロシア国立図書館手稿部にあるピリバソフ（ヴァシリイ・アレクセエヴィチ、一八三八—一九〇四）とクラエフスキー（アンドレイ・アレクサンドロヴィチ、一八一〇—一八八九）のフォンドに所蔵されている。

V・A・ピリバソフは一八六一年にペテルブルグ大学を卒業し、二年後の一八六三年にドイツ・フランス史で修士号、一八六七年には博士号を取得した。しかし、その後は主に、一八世紀から一九世紀の初めのロシアの歴史の研究に従事した。一八七一年から一八八三年でリベラル系の新聞「声」の編集者を務めた。公刊された彼の主な研究書としては、

『女帝エカチエリーナ二世』、『歴史的伝記』、『モルドヴィン伯爵家文書』がある。ピリバソフは、ロシアの文書館はもろんであるが、フランス、イギリス、ドイツの文書館でも多くの仕事をした。まさにこのことにより、これらの国々の文書館からの大量の写し文書があることの説明ができる。その中には、日露関係に関わる文書が複数あり、とりわけ、上記で引用した侍従レザノフの「皇帝陛下への上奏書」の写しも保存されている。

ピリバソフはジャーナリストのクラエフスキーの岳父に当たる。クラエフスキーは、雑誌「祖国雑記」【‘Отечественные записки’】の発行者であり（一八三九年から一八七六年まで）、同じく、新聞「ペテルブルグ報知」【‘Санкт-Петербургские ведомости’】「声」【‘Голос’】の発行者でもあった。クラエフスキー文書に入っているのは、出版活動に関係する機関や人物と彼がやり取りした書簡である。言いかえれば、番号七三のフォンドは、V・A・ピリバソフの文書史料とA・A・クラエフスキーの文書史料を一つにまとめたもので、本質的には、性格の異なつた二つのフォンドから成っている。

前者の文書、すなわちピリバソフの文書史料が我々の興味を呼び起こす。というのは、彼が取ってきた写しは、非常に価値のあるもので、信頼に足るものであることは疑う余地がないからである。一方、研究者としてのピリバソフ自身の文書史料は、一九一三年一二月にO・Ja・フェイグナから、一九一五年にはボリス・エンマヌイロヴィチ・ノリデ教授（一八七六一—一九四八）からそれぞれ、ロシア国立公共図書館【サンクト・ペテルブルグ。「プブリチカ」。通常、日本語では、単に「ロシア国立図書館（サンクト・ペテルブルグ）」と表記されるが、ロシア国立図書館（モスクワ、レーニン図書館）と区別しやすくするため、名称通り「公共」を入れておいた。】に寄贈された。このピリバソフのフォン

下には一三三七点の史料が所蔵されている。

ロシア国立図書館手稿部には、「手稿本基本コレクション【Основное собрание рукописной книги, сокращенно: ОСРК】と名付けられた特別なフォンド番号五五〇【Ф. 550】がある。このフォンドの目録は、タイプ打ちで二五二頁から成り、所蔵点数は八四九九点にのぼる。フォンドは一八部門から成る。第一部門は宗教・神学関係、第二部門は法と宗教、第三部門はフリーメーソンの著作類、第四部門は歴史（目録の頁では一四一一一九一頁）である。この第四部門に、日露関係史に関わるファイルがある。

とりわけ、そこには手稿本二冊からなる経営代行【приказчик「番頭」の意】シエメリンの日誌、レザノフの日記が含まれている。露米会社の経営代行で使節レザノフの直属の配下であったシエメリンの日誌の正式名称はかなり長いものであるが、このような題名は一八世紀から一九世紀前半にかけて一般的であった。すなわち「皇帝陛下下庇護下の露米会社の経営代行シエメリンの一八〇五年の日誌、同会社の通商関係に従ってのフリゲート艦ナジェジダ号とネヴァ号のクロンシタット出航以後のサンクト・ペテルブルグから日本と中国に向かう彼の最初の航海」【«Журнал 1803 года Российско-Американской компании под Высочайшим Его Императорского Величества покровительством Пребывающей, Прикащика Шемелина, со дня первоначального его вояжа по торговельмь отношениямь оной компании изъ Санктпетербурга в Японію и Китаю, по снятіи с якорей фрегата Надежды и Невы съ Кронштагской Рейды»】である。

第一巻は一八五葉（すなわち二七〇頁）大きさは縦二二・五cm×横三三・七cm、厚さ三・八cm、第二巻は□□葉（今日の言葉では□□頁）【ママ】大きさは縦二二・五cm×横三三・七cm、厚さ三・三cm。第一巻は図書請求

記号番号F. IV. 59/1 財産目録番号【登録番号】四六〇五、第二巻は図書請求記号番号F. IV. 59/2である。叙述は「六月二六日軍艦ナジェジダ号とネヴァ号は午前一〇時半抜錨、弱い東南の風【при малом оструюском ветре 誤記か】で、二艦は順調に出航した」との言葉で始まる⁽²⁾。

日誌の保存状態はよく、しっかりとした良質で丈夫な表装、革製の表紙であるが、第一巻は背が破れており、折り目に沿って、上から下まで一直線に剥がれている。紙は厚く、淡青色。本文は、見たところ全編を通して、書記によりしっかりとした筆跡で書かれている。後年、この日誌は、サンクト・ペテルブルグで、二巻ものとして、一八一六年、さらに一八一八年、それぞれ出版された。

このフォンドには、『レザノフ日記』【原題「Журнал Путешествия Двора Его Императорского Величества Действительного Камергера Резанова из Камчатки в Японію и обратно в 1804—1805 годах»（「皇帝陛下の上級侍従レザノフのカムチャツカから日本の往復の日記一八〇四—一八〇五」の意）】が保存されている。

ニコライ・ペトロヴィチ・レザノフ（一七六四—一八〇七）はサンクト・ペテルブルグで生まれ、良い教育を受けた。家族は宮廷付き【の者たち】と大きな繋がりがあり、偉大なる詩人で有力な高官、ロシア帝国アカデミー会員、二等文官、元老院議員、司法大臣（一八〇二—一八〇三）であった、ガヴリール・ペトロヴィチ・ジェルジャーヴィン（一七四三—一八一六）と親交があった。ジェルジャーヴィンはレザノフをその若い時から庇護した。一七九一年、ジェルジャーヴィンはエカチエリーナ二世（一七二九—一七九六、在位一七六二—一七九六）により、元老院覚書に沿った報告を女帝にするための秘書官に任命された。レザノフは詩人ジェルジャーヴィンの庇護のおかげで、官房主任の地位を得た。一方、ニコライ・レザノフは、時折、特別依頼官吏として、女帝の依頼

を遂行するようになった。後に、新しい若い寵臣プラトン・アントノヴィチ・ズーボフ（一七六七—一八二二）付きになった。ニコライ・ペトロヴィチ・レザノフは、うまく、シベリアの大商人の娘アンナ・グリゴリエヴナ・シエリホヴァと結婚できた。レザノフは、宮廷との繋がりを利用して、皇帝パーヴェル一世（一七五四—一八〇一、在位一七九六—一八〇一年）の勅令により露米会社を設立させることに成功した。同社の経営主体はイルクーツクからサンクト・ペテルブルグに移された。露米会社のトップには、四人の社長が着任した。故グリゴリー・イワノヴィチ・シエリホフ（一七四七—一七九五）の未亡人の頼みで、露米会社の社長の一人にミハイル・マトヴェエヴィチ・ブルダコフ（一七六六—一八三〇）が着き、副社長に娘婿アレクサンドル・アンドレエヴィチ・ブルダコフが着いた。一方、レザノフは同社の全権取引交渉人の役職に就いた。一八〇二年秋、【レザノフの】妻アンナ・グリゴリエヴナ・シエリホヴァが、第二子の誕生の後他界した。まさにその時、アレクサンドル一世（一七七七—一八二五、在位一八〇一—一八二五）はレザノフを遣日使節に任命した。

マカール・イワノヴィチ・ラトマノフの日記

マカール・イワノヴィチ・ラトマノフは艦長I・F・クルーゼンシュテルンの筆頭補佐役だったが、当時の文書の中では、ナジェジタ号の第一大尉と書かれている。世界周航航海の時、ラトマノフは日記を付けていた。保存されている日記には三つのバリエントがある。

(一) ロシア国立海軍文書館所蔵 (РГА ВМФ, фонд 14, опись 1, дело 149, 56 листов)。

(二) ロシア国立図書館手稿部所蔵 (ОР РНБ, фонд 1000, опись 2, дело 1146, 67 листов)。

(三) パリのフランス国立図書館所蔵に三種。

(A) 美しい筆跡で書かれている。清書したもの。題名「世界一周旅行」、大きさ二三・五cm×一八・二cm、計五葉裏表のノート (図書請求記号番号: Slave 104)。

(B) 題名「クルーゼン「シユテルン」の世界周航」。大きさ二一cm×一七cm、計四〇葉裏表のノート (図書請求記号番号: Slave 103)。

オリガ・ミハイロヴナ・フォードロヴァは、このノートは「一八〇五年七月二十七日で終わっている航海日記、すなわち、ロシア国立海軍文書館所蔵手稿の一八〇五年八月二日から先を補充するものである。このようにして、パリとサンクト・ペテルブルグと、ばらばらになって別々に保管されていた二冊のノートは、二百年後、一つに結ばれ、ラトマノフにより艦上で付けられ続けた本来の日記の完全なテキストとなった」と指摘している。³⁾

(C) 第三のノートは大きさ二〇・五cm×一七cm、計四八葉裏表でラトマノフの書簡の草稿。

書簡の宛先は、ラトマノフの姉宛、友人たち、つまり、【後に】海軍大将【一八〇七】、海軍大臣【一八〇二—一八〇九】になったパーヴェル・ヴァシーリエヴィチ・チチャゴフ【一七六七—一八四九】宛、歴史家、文学者、サンクト・ペテルブルグ科学アカデミー正会員であるニコライ・ミハイロヴィチ・カラムジン（一七六六—一八二六）宛。皇帝アレクサンドル一世のネヴァ号艦長クルーゼンシュテルン宛勅書やレザノフの日本での談話等の写しもある (図書請求記号番号: Slave 103 (1))。

オリガ・ミハイロヴナ・フォードロヴァは、ラトマノフの日記を詳細かつ丹念に調査し、二〇一五年、『マカール・ラトマノフ日記に見るロシア初の世界周航遠征（一八〇三—一八〇六）』【“Первая русская кругосветная экспедиция 1803-1806 в дневниках Макара Рагманова”】に

題した書物を出版し、次のような結論を得た。

「自己の日誌の中で、ラトマノフは、三つのバリアントの中で同じ出来事をさまざまな視点から述べてはいるものの、同じことの繰り返しをほとんど書いていない。ラトマノフの文体は非常に独特である一方、句構成も極めて独創的であり、彼の日誌は独立した文献学的研究の対象に値する。これらの日誌の文体を形成している言語要素としての役割を果たしているのが、特別な航海専門用語と抽象概念語彙、および古い語順（形動詞【あるいは形容分詞】を文の最後に置くなど）の痕跡を留めた独特な統語法である。【形動詞等は現在一般に常に文章の始めに置かれる⁽⁴⁾】。」

コンスタンチン・アダモヴィチ・ヴォエンスキー（一八六〇—一九二八）

K・A・ヴォエンスキーは、ロシアの将軍、歴史家で、駐東京ロシア公館に五年間勤務する。彼は、ロシア外務省付属国家文書館やロシア外務省付属総文書館【Государственный архив Министерства Иностранных дел России】 Главный архив Министерства Иностранных дел России】両者とも革命前のロシア外務省の文書館】から、日本に関する文書の写しやその他の史料を収集することに成功した。ロシア革命後は、マルタに移住、地元の大学で教える。

ヴォエンスキーの収集した文書はサンクト・ペテルブルグのロシア国立図書館の手稿部に収められた。このようにして、フォンド番号一五二は作られたが、その中の史料は本稿執筆に際しても使用した。

ロシア国立公共図書館はヴォエンスキーの未亡人からヴォエンスキー文書を購入した。膨大な蔵書を購入したのは、愛書家フォードル・グリゴロヴィチ・シーロフ（一八七九—一九六二）である。一九四二年一月

のレニングラード封鎖時に、シーロフが住んでいた家は焼失した。蔵書の大部分は壊滅し、残った部分は作家の書棚に売られ、一部はロシア国立公共図書館に入った。検閲委員会に勤務していた時のヴォエンスキーの数々の尽力のおかげで、著名な歴史家ビリバソフのいくつもの著作、たとえば『エカチェリーナ二世の歴史』なども保管され、世に出ることとなった。このビリバソフによる出版物の現物は公式には灰燼に帰したとされていた。すなわち、実質的に、ヴォエンスキーがビリバソフの『エカチェリーナ二世の歴史』を忘却の世界から救い出したということになる。

「象」時計の最初の記述のひとつ

将軍への贈り物に予定された「象」時計の最初の記述のひとつは、一七九一年タヴリーチエスキー宮殿の祝典の記述の中に見られる。

詩人ガヴリール・ロマノヴィチ・ジェルジャーヴィンは、露暦一七九〇年二月一日（西暦二月二日）のトルコの難攻不落の要塞であったイズマイル要塞の奪取に捧げる頌詩「イズマイル要塞の奪取」を創った。この頌詩を大変気に入った女帝エカチェリーナ二世は、ジェルジャーヴィンにダイヤモンド付の煙草入れを下賜し、この詩人を「私はこれまで、貴方のラッパが、かくも大きく鳴り響くとは知りませんでした。まるで心地よい堅琴のようです」と褒め称えた。

トルコ人に対する勝利の後、サンクト・ペテルブルグに到着したG・A・ポチョムキン公爵もまた詩人ジェルジャーヴィンに注目し、ジェルジャーヴィンを一七九一年四月二八日にタヴリーチエスキー宮殿で開かれた祝宴に招いた。エカチェリーナ二世を筆頭とする帝国の政治エリートたちが列席した祝宴の様子は、詩人ジェルジャーヴィンにより、同様に、印象深く、「イズマイル奪取を記念して、陸軍元帥にして偉大なる総司令官、グリゴリー・アレクサンドロヴィチ・ポチョムキン」タヴ

リーチエスキー公爵閣下【タヴリーダ公爵とも。タヴリーダとは今日の南ウクライナ地方とクリミア地方に相当する県で、一七八三年のクリミア併合後、ポチヨムキンが知事になった】のもとで行われた祝宴の叙述の中で記されている。

この叙述の中で、ジェルジャーヴィンはかなり詳細な象時計の記述を残している。後に一七九二年、女帝の許可を得て、この叙述は、ヨハン・カール・シノール（一七三八―一八一二）の印刷所で印刷にふされた。この出版物は、一枚ものの絹の織物装丁で蓋部分に金の打出装飾のある枠付きで出版された。見返しは「大理石風」の紙によって作られた。この三九頁の薄い本の大きさは縦二〇×横二一・五cmである。この薄い本は、ロシア国立図書館手稿部に保管されている。

日本人への贈り物

使節団がペテルブルグを出発する一ヶ月前に、皇帝アレクサンドル一世の命により、使節としての威信を高めるためにレザノフに、聖アンナ一級勲章が下賜され、宮廷侍従の称号が付与された。日本皇帝（とりもなおさず「將軍」）のことが想定されていた）および有力な高官たちのために、皇帝官房からの支出で次のような贈り物が用意された。

○帝室磁器製作所から

（一）花瓶四対、（二）食器セット六セット【原語は「セルヴィス」とも表記される、元フランス語。宮廷用は元々総数数百から千個にも及ぶ龐大な食器のセット。ディナー用、デザート用と各種用途がある】

○帝室ガラス製作所から

（三）鏡七一枚（大きさ種々）、（四）鏡二五枚追加、（五）テーブル板一五枚（多色ガラス製）

○帝室タペストリー工房から

（六）皇帝アレクサンドル一世の肖像タペストリー一枚、（七）花付淡青色花瓶を描いたタペストリー一枚【（a）淡青色地の花瓶に花束が飾られている、（b）花模様の描かれた淡青色地の花瓶、（c）地色は淡青色だがそこに多色の絵付けがされている、のいずれかかと思われる。いずれもタペストリーとしてはやや奇妙ではあるものの、芸術性よりも軽量な商品見本と考えた】、（八）タペストリー三枚（大きさ種々）

○「柔らかい古着」（毛皮）

（九）黒狐の毛皮一枚、（一〇）オコジョの尾付き毛皮一枚【オコジョは極めて小さな動物で、一匹では装飾用としての毛皮の体をなさず、また「尾」が複数なので、何匹ものオコジョの毛皮を縫い合わせて、尻尾をたくさんぶら下げたものか】

○生地

（一一）錦三〇〇アルシン、⁽⁵⁾（一二）ピロード三五六アルシン、（一三）サテン六四アルシン、（一四）イギリス羅紗一枚、（一五）イスパニア羅紗二枚、（一六）黒羅紗二〇枚

○各種品物

（一七）象型青銅製機械時計。エルミタージュから取り寄せられたもの、（一八）象牙細工蓋物五〇個、（一九）皇帝グラス一〇〇個、（二〇）小銃と短銃（各複数）、（二一）鋼鉄製短剣とサーベル、（二二）鋼鉄製小机一台、（二三）燭台（複数）、（二四）金メッキ銀縁カックグラスの砂糖入れ蓋物八個、（二五）ガラス製水差し二二個、（二六）凹面鏡付クリン燈二個。街灯・灯台照明用、ロシアの著名な機械工I・P・クリピン製作、（二七）戴冠記念メダル二五個、（二八）戴冠記念銀メダル二〇〇個、（二九）長さ三九アルシンの淡青色の勲章用綬、【三〇】欠ママ。ただし、ここにあったのは「ウラジミール勲章綬一四二アルシン」と思

われる(ヴォエンスキー「史学雑誌」一九一〇)、(三二)鋼鉄製ボタン二セット、(三三)「ロシアに居住する諸民族概観」二部【同じもの二冊】、(三三)「ロシア帝国全体地図」四枚、懐中用小地球儀三六個

「象」時計の件で伯爵N・P・ルミャンツェフは、次のような内容の書簡をレザノフに送った。

「拝啓

ニコライ・ペトロヴィチ様

謹んで貴下にお知らせ致すことがあります。現在エルミタージにある機械仕掛けの青銅象を対日使節団と共に送り出す件に関する交渉は、見事に成功しました。私にその象を下賜することに陛下がご同意なされたことが、皇帝陛下のご意思に従い、ニコライ・ニコライエヴィチ・ヴォセリツェフから二等宮廷官トルストイ伯爵に伝えられました。

以上のことを貴下にお知らせ出来ましたことを私は光榮に存じます。

敬具

ニコライ・ルミャンツェフ⁽⁷⁾

軍艦ナジエジタ号とネヴァ号乗組員の構成と使節の構成

一八〇六年、雑誌「リツェイ」は、二隻のロシア軍艦のサンクト・ペテルブルグ帰還後すぐ、同誌の二つの号にわたり、「ロシア人の世界周航」について、簡単に記した論文を載せた。そこからは、両軍艦の乗組員や使節に随行した者たちの人数構成、そして、当時としては、遠征と使節派遣に莫大な支出をしたことが見て取れる。

「アレクサンドルの治世は、その時代に優れた世界周航遠征が行われたということだけでも将来にわたってその名を残すであろう。

この遠征のために、露米会社の裁量下、ロンドンで、一八〇二年末、軍艦ナジエジタ号(かつての船名はレアンドール号)とネヴァ号(かつての船名はチームズ号)が購入された⁽⁸⁾。ナジエジタ号は四三〇トン砲二八門艦載、ネヴァ号は三七二トン艦載砲一六門である。

軍艦は二隻とも海軍所属であったために、ナジエジタ号艦長は海軍少佐イワン・フョードロヴィチ・クルーゼンシユテルン、ネヴァ号艦長は海軍少佐で叙勲者ユーリー・フョードロヴィチ・リシヤンスキーであった。

両人の指揮下、ナジエジタ号乗組員は、海軍大尉四名、海軍少尉一名、舵手一名、副舵手一名、博士一名、医師一名、その他下級雇員四二名、士官付き五一名。

上記以外に、対日使節の一員である者たちや露米会社雇いの者たちも派遣された。

ナジエジタ号乗組員は、特命使節、上級侍従で叙勲者レザノフ(この者には通商に関しての政治的企図が託されている)、使節の一員で叙勲者五名、教授二名、画家一名、アカデミー会員一名、日本人四人、士官候補生二名、使節の召使三名、露米会社の経営代行一名、大工頭一名、手工業職人七名、計二七名、艦付き八六名。

ネヴァ号乗組員は、使節のための司祭一名、露米会社のための船大工助手一名、同会社の経営代行一名、手工業職人二名、計五名、艦付き五六名。

露米会社の船荷は以下の通り。

アメリカ向け貿易品各種、造船用物資各種、工場で作られた食料、艦付きの者たち用の食料、下賜品を含む士官たちへの二ヶ年分の俸給、艦自体も含め不測の事態を想定した予備費六六四、〇六九ルーブル九八・

四五コペイカ。

一八〇五年七月二六日午前一〇時半、二隻の軍艦は、ロシアの商船旗を付け、クロンシュタット停泊地を抜錨し、出航した。一方で、皇帝からご許可により、ロシア海軍分艦隊の軍旗の白い旗も掲げる権利を得ていた。【アンドレーエフ旗、白地に細い青のX十字(つまりバツ印)。翻っている全体としては白っぽい旗に見える。】

コンスタンチン・アダモヴィチ・ヴォエイコフ【ヴォエンスキー】は使節団の全構成員を挙げている。

「遠征隊長で、露米会社の代表取締、特命全權使節、上級侍従レザノフ。

○使節中の叙勲者

(一) 皇帝陛下の大本営付き幕僚、陸軍少佐エルモライ・フリードリッツイ【フリードリッヒ】(地図制作・築城任務)、(二) 七等官フォードル・フォッス(シベリアにいたことがあり同地の状態を知っている者)、(三) プレオブラジェンスキー近衛連隊陸軍中尉トルストイ伯爵。

○学者、画家、その他

(四) 天文博士ゴルネル、(五) 自然史教授トレジウス、(六) 自然史教授フォン・ラングスドルフ、(七) 医学博士モーリッツ・リバント、(八) 医学、植物学の博士プリンキン、(九) 画家クルリヤンツェフ、(一〇) 司祭ゲデオン、(一一) 露米会社委託総取次フォードル・シエメリン、(一二) 露米会社経営代行コロヴィツィン¹⁰⁾」

このようにして、露暦七月二六日(西暦八月七日)軍艦ナジェジタ号とネヴァ号はクロンシュタットから長い航海の途に就いた。ナジェジタ号にはカムチャツカ向け貿易品と日本政府代表たちへの贈り物が積み込

まれていた。レーヴェンシュテルンはこれに関し次のように説明している。

「露米」会社の経営代行が複数の箱詰め荷と共に到着した。箱のひとつは船室の大ききさだった。おそらく露米会社の経営代行自身¹¹⁾がそこに住むつもりなのだろう。さもなかったら場所など見つけるのは難しい。」

艦の乗組員たちは大変窮屈な状態で世界周航旅行をせざるを得なかった。そのため、使節N・レザノフと艦長I・クルーゼンシュテルンも例外ではなく、二人で面積約六㎡のひとつの船室を使うはめになった。(全員、長いこと艦内で非常に窮屈な状態で生活せざるを得なかったために、当然のことではあるが、使節と海軍士官たちの間には、互いに相手を好きになるような関係を築くことができなかった。)

ロシア語文字史料に見る贈り物に関する記述

レザノフは長崎に手ぶらでやって来たわけではない。オランダ語で行われた日本当局の代表者たちの質問に対して、レザノフは「私は次のように答えた。：友好的関係にあることが我が皇帝陛下にとっていかに心地よいことを証明するために、私は使節として派遣された、偉大なる、かつ、隣り合った両大國間の友好関係を永久に確立し、相互利益に沿って通商を開くことが私に与えられた課題である。陛下への贈り物(強調はクリモフ)以外には商品は何も持参していない、我々が乗ってきた船は軍艦である、そして最後に、乗組員と士官の人数を言った。」¹²⁾とした。それ以外に、レザノフは、オランダ語で書かれた次のような内容の書状を日本の役人たちに手渡した。

「全ロシアの偉大なる皇帝のもとから日本の偉大なる皇帝、テンジンクボウ陛下のもとへ上級侍従レザノフは使節として派遣された。テンジンクボウ陛下に贈り物を進呈し、陛下の臣民四名を帰国させるためである。私は首都サンクト・ペテルブルグを昨年七月二六日に出発した。艦

を長崎港内へ誘導するための水先人の派遣を日本政府に願うする。⁽¹³⁾

使節の行動は、最初からすべて、商務大臣で伯爵ニコライ・ペトロヴィチ・ルミャンツェフ（一七五四—一八二六）から彼に与えられた訓令によって規定されたものであった。

軍艦ナジェジダ号は、カムチャツカから日本に向かう途中、強い暴風雨に遭遇し、修理を必要としていた。しかし日本の役人は、長崎湾の内港【*baypenhui peiu*】への停泊許可をすぐには出さなかった。レザノフは、執拗に入港要請をせざるを得なかった。

「艦は暴風雨の後の破損が大きく、浸水がひどい状態である、…水に浸かったままでロシア皇帝からの贈り物が駄目になるので、それを防ぐため、まずは我々に場所を与えて下さるをお願いします。」⁽¹⁴⁾

使節は、「それら（贈り物のこと―クリモフ注）をきちんと整えることができるような」家を割り当ててくれるよう頼んだ。ナジェジダ号上で行われた日本役人との会談のうち一八〇四年九月二八日の会談で、レザノフは、アメリカ北部にロシアの領有地が置かれていると述べたが、このことは日本人に驚きを与えた。日本人たちは地図上にその領有地を示すよう求めた。

「その地図は我々が彼らに見せたものである。役人たちはヨーロッパ語で書かれたその地図を読んでいたが、筆頭バンジョースが通訳に眼鏡を求めたので、私が自分の眼鏡を渡したところ、彼は大いにその眼鏡を気に入った。私は、他の者にも与えたところ、幸いにも同じように彼らの目に合ったので、友好の印としてその眼鏡を受け取ってほしいと言った。彼らは拒否した。私は彼らに、これは贈り物ではない、私は彼らには別のものを用意している、と言ったが、彼らはお礼を言った後で、受け取ることは法で禁止されている、奉行にも許可を求める必要があると言った。その後で彼らに懐中用地球儀を差し出したところ、彼らは大い

に気に入って眺めて楽しんだ。」⁽¹⁶⁾

これらの品を日本の役人に土産として手渡そうとしたレザノフの試みはうまくいかなかった。日本人たちはまた、ロシア皇帝の衣装と勲功章について詳細に質問をした。そこで使節は、「皇帝と女帝の肖像画を彼らに見せるよう命じた。それらは日本人たちが感謝の気持から購入したものだ。役人たちは肖像画を賞賛し、うやうやしく受け取り、その美しさに驚嘆していた。一方日本人たち（海難に遭い、使節団とともに日本に帰ってきた者たちを指す。―クリモフ注）は、皇帝も女帝も本物の方がもっと勝っているとした私の言葉を承認した。通訳のセキセイモン【大通詞・石橋助左衛門】は、青い綬を身に付けたエカチェリーナの肖像画を持っており、オランダ人を通して取り寄せたものであると言った。」⁽¹⁷⁾

一〇月五日の会談でレザノフの話は鏡に及んだ。使節が市長と名付けた役人が、「一枚のガラスで出来た縦二アルシン、横半アルシン【一アルシン＝〇・七一m】の鏡を持っていたが、五年ほど前にオランダ人から貰ったものであると言った。その後で私は、皇帝（将軍―クリモフ注）のために用意した顕微鏡を彼らに見せた。彼らは、オランダ人たちが既に皇帝に提供したと言った。」⁽¹⁸⁾

一〇月一九日と二〇日、レザノフの命令で中央部上甲板に、贈り物とした持参したクリピン燈【一八世紀後半技師クリピンが発明した反射燈。後半、注28の本文付近に詳細な説明がある】が灯された。その明るさは実に鮮やかなものであった。見張り役の日本人たちは、目にしたものを報告するために小舟で町に向かった。

一二月五日、使節は、交渉時に住むことになる陸上の建物へと厳かに敬意をもって移動させられた。家の周囲には高い垣が設けられた。

「周囲の垣は這い登って越えることは不可能なほど高く、隙間がなく何も見えなかった。私を送ってくれた（ロシアの―クリモフ注）士官た

ちは艦に帰っていった。役人たちは帰り際に、明日贈り物を移動させるために出来るだけ多くの船を用意するよう奉行たちから命令が出ていると言った。士官たちが退去すると、海に面した門はすぐに施錠され、鍵は町に持ち運ばれた。私が、この建物は要塞なのか、それとも使節用の家なのか、私は捕虜の身なのか、それとも客なのか、と聞いたところ、彼らは、これは我々の習慣で、嘆くには及ばない、と言った。⁽¹⁹⁾

翌一二月六日、陸の倉庫への贈り物やその他の物の移動が始まった。「七日に、使節の品物の一部と索具が運ばれてきて、別の倉庫も一杯になった。品物が下ろされる際には、二名の役人が艦上でそれらについて書き留めたが、また私のいる屋敷にも書役たちはいた。その後、艦から役人がやって来て、陸上にある物品と更に照合した。」

つまり、艦から下ろされた物、艦上に残された物、陸上の屋敷にある物を丹念に二重のチェックをしていたということであるが、これは、間違いと物品が売られることを避けるためであった。レザノフは次のように記している。

「日本人たちの仕事ぶりは驚くほどであった。ロシア帝国の鏡複数が運び込まれた際、そのうちの一つを包みから開けて見て、全く壊れていないことが判明すると、日本人たちは皆近寄ってきた。そして、その大きさに驚いたが、すぐに欠点に気がつき、こんな素晴らしい鏡にこんな多くの気泡があるのは残念だと言った。またその日、我々は象の形をした時計を開けた。日本人たちはその時計に非常に驚嘆した。私が、この品は気に入ったかと聞いた時、彼らは、大変素晴らしい、言葉では説明できないくらいだ、と言った。私は彼らに品物を置く机を用意してくれるよう頼んだ。彼らは実行すると約束した。⁽²⁰⁾」

翌一二月八日、「朝早く、海岸に面した門が開かれ、艦からの重量物の移送が再開されたが、ついには最後の倉庫が埋め尽くされそうに

なったので、彼らは、傍にある中国人専用の倉庫を更に二つ我々に提供すると約束し、中国人たちに片付けるよう命じた。」

その日、レザノフを、彼の言葉によれば、町の長が訪問した。

「昼食の後に町長のタカシマシロベサマ【長崎町年寄・高島四郎兵衛】が私を訪問し、彼は、私が必要なことはすべて彼を通して実行されることになっている、私が必要なことは、出来るだけ早く実行できるようにするため、前もって申し出てほしいと告げた。私は彼に礼を言い、日本人が大いに好むと私が気がついたコーヒーを出した。…私が彼らに、鏡をどうやって運ぶのかと聞いたところ、彼らは、人力で運ぶのである、かつて中国の皇帝から送られてきた生きた象も人力で江戸に運び届けた、と言った。この日、通訳がこっそりと私に、私に別の家が用意されている、近いうちに私は江戸に向かうことになっている、通訳の長と五人の通訳が私付きに任命されている、と言った。⁽²¹⁾」

一二月一〇日、奉行たちのところで予定されている応接儀式のことに話の多くが及んだ。話は厳しい内容のものであった【この日レザノフは、奉行との会見での平伏を要求され、何度も断固激しく拒否している】。その後で使節は、電気機械【エレキテルか】の実演をすることを申し出た。どうやらそれは、議論の際に生じた緊張を取り除くためだったようである。レザノフは自分の日記の中で文字通り二つの文を書き記している。

「そうこうするうちに、ラングズドルフ博士はエレキテルで日本の役人たちをすっかり虜にし、様々な実験をして見せたが、それらは日本の役人たちに大いに気に入った。夕方我々は極めて友好的に別れた。⁽²²⁾」

一二月一二日、使節が住む家の並びにある倉庫を中国人が引き払った後、ナジェジダ号に残っていた荷物の荷下ろし作業が始められた。レザノフは次のように記している。

「日本人たちは極めて礼儀正しかった。私のところには役人たちと、

彼らに同行の通訳ソザイマ【小通詞・本木庄左衛門】が来た。私は、通

訳が私の話を然るべく訳していないこと、役人たちの答えをきちんと私に伝えようとしないことに気がつき、通訳に不満であることをすぐさま役人たちに説明したところ、その通訳は怒って、自分はこれ以上うまくは出来ない、自分は通訳として勤勉であり自分の職務は知っている、と私に言った。私は彼に、怒らないでほしい、彼が通訳しているのはオランダ商人ではない、皇帝の使節なのだ、と言ひ、役人たちには、スキゼイマ【大通詞・大石助左衛門】、あるいは、他の誰かを寄越すよう言った。役人たちは私のところから退去する際に、象時計を動かしてみてもいいと頼んだので、私は、今は出来ない、数時間後に彼らを呼ぶ、と言うよう命じ、実際にその通りにしたところ、彼らは怒ってしまい、立ち去ろうとしなかった。どうやらソザイマが行かないよう彼らに言い含めたようだった。私はそのことを気に掛けず、彼らに、次の日には通訳の長を寄越すよう、また、奉行たちに命令をお願いするのを忘れないようにと念を押した。私が出してほしい命令というのは、私の士官たちが艦と私の間を途中で邪魔されずに往き来できるようにする、つまり、私と艦とが自由に連絡が取れるようにする、というものである。やっとな一日が無事終わった。⁽²³⁾」

一三日に艦からの全ての荷の荷上げが終了した。この日レザノフは、彼が言ったことすべてをオランダ語で必ず書き留めるよう依頼した。その後で彼は、情報が歪曲されずに奉行のところまで届くことを確認するため、書かれたものを再点検するのである。

商務大臣で伯爵ルミヤンツェフからレザノフに与えられた、日本へ使節として行くための特別訓令の中では、贈り物の扱い方が明確に述べられていた。最も高価な贈り物は将軍を念頭に置いたものであった。例えば、訓令の第四条では、長崎港に到着直後の日本役人の質問への対し方

が述べられている。

「貴下は以下のように答えるべきである。貴下は、国書と（後日然るべき裁可が下りた場合）貴下と共に送られる偉大なる絶対君主日本皇帝への贈り物を携えてロシア皇帝から派遣された者であること、貴下が持参したのは生活物資と航海中必要な物のみであること、貴下に与えられた任務と指令は唯一、貴下の主君からの国書と贈り物を然るべき儀式と莊厳なしきたりに則り、偉大なる絶対君主日本皇帝に差し出すことが出来るよう、日本の習慣に従ひ、日本皇帝への謁見を願ひ出ることである。⁽²⁴⁾」

更に第一二条でルミヤンツェフは、贈り物のことに再び述べている。

「主君から日本皇帝（将軍―クリモフ注）に宛てた贈り物については、国書の中に記されている。大臣たちやその他の高官たちに何を贈るべきかについては、貴下が自身で問い合わせられたし。何を誰に贈るべきかを貴下に正確に教えてくれるような人は沢山見つかることであろう。その理由は、日本政府【原語は *Правителство* 日本「官廷」の意】では誰が何を外国人から受け取ることができるかが、名を列挙されているからである。これらの贈り物は毛織物から成っており、貴下は後日受け取ることになる。⁽²⁵⁾」

ロシア政府は、交渉が成功裡に終わり、日本との通商の許可が得られることを期待していた。これに関連してルミヤンツェフはレザノフに、将軍の謁見が終わった後で、影響力のある者たちに贈り物をするよう指示している。

「謁見の後で貴下は、貴下の外交交渉（交渉―クリモフ注）に或る程度の影響力を持つてあろう日本の全閣僚に敬意を表し、彼らに贈り物をし、貴下の主君の国書に対する一刻も早い回答を要請することになろう。日本皇帝からの贈り物は、恭しく受け取り、返答の国書を持ち出す際には、貴下が携えて派遣された国書と同じように扱うことを命ずるよう。」

自分の部屋に着いた時は、貴下を送ってくれた者皆に、貴下に対し贈り物がなされた時と同様に、過不足なく贈り物をする。日本にいる間、貴下がロシア臣民の庇護を要請する相手であり、ロシア人が日本の習慣を知らないことに寛容であろうと思われる長崎奉行に対しても、同様に振る舞うこと。²⁶⁾」

使節の随員の一人で使節の直属の部下であった、露米会社の経営代行のF・I・シユメリンは、長崎の日本役人たちの最大の注意を引いた贈り物について、かなり詳細に書き留めている。

「使節は、日本政府【原語はШноцкий явоб 日本「宮廷」】に贈る品物がすべて無傷の状態かどうか、特に、鏡など、ガラスから出来ている物を確かめる必要があった。…それゆえ、運び出しが終わったらずに、幾つかの箱が開けられたが、まず最初に取り出されたのは、青銅で製造され、加熱溶融金メッキがほどこされた象であった。その象は、ねじを巻くの中に組み込まれた機械が動き出し、象は鼻を前後左右に振り回し、目をきよるきよるさせ、耳を立てたり下ろしたりして、尻尾を振り始めた。一方で、はめ込み時計が動きだし、鐘を鳴らし、同時に、象の上の尖塔では、ダイヤモンドのピラミッドとルビーの散りばめられた車輪が回転しながら輝き、様々な光を発する。まるで小さな花火のようだ。見事に作り上げられたこの機械装置は、所々に、エメラルド、青コランダム(サファイヤ)、真珠がちりばめられ、大いに日本人たちの気に入った。それ以外に開けられたのが大きな鏡のひとつで、金彩多色色ガラスの縁の付いた高さ四アルシンの鏡であった。その大きさが並はずれていることもあって、日本人たちには素晴らしいものと思えたようだ。それに劣らず日本人の好奇心を引き付けたのは大きなエレキテルであった。ランダグストルフ氏はエレキテルの力と効果を様々なやり方で日本人たちに見せた。彼らは、エレキテルが発する光を目にしたり、その衝撃を感じ、

驚嘆したり、喜んだりした。長崎の役人で、我々のいるメガサキ【梅ヶ崎】に來なかつた者、見たこともないような物を目にしなかつた者は一人もいながつた。日本士官たちのうち或る者たちは、使節に、奉行自身も役人に身を隠して見物に來たことを明言した。²⁷⁾」

また、レーヴェンシユテルンは、ロシアの独学で職工となつたイヴァン・ペトロヴィチ・クリビン(一七三五—一八一八)が発明した照度を強めるために鏡を付けた二個の角燈について次のように書いています。

「これは、小さな四角の鏡が隙間無くはめ込まれた四面鏡の燈である。純粹に子供っぽい発想ではあるが、それは、大切に驚くべきことのように思える」。²⁸⁾

象時計はイギリスで製作されたもので、それが収められている箱には「ロンドン」という表示が付けられていた。しかしレザノフは、レーヴェンシユテルンが言うところによれば、そんなことは一切気にすることなく、この時計はロシアの作品だと公言した。「サンクト・ペテルブルグで製作された物に「ロンドン」と書く、あるいはその逆は、ヨーロッパ全体で「行われていること」なのです」。²⁹⁾

レーヴェンシユテルンの言葉によれば、使節はそう言つて皆を納得させた。しかしながら、海軍士官レーヴェンシユテルンの証言はそのまま鵜呑みにするのは危険である。というのは、彼のレザノフに対する見方は、およそ客観的とは言えないからである。

ロシア人目撃者が記録したものから判断する限りでは、日本人の興味を最も引いたのは「象」時計であった。従つて、この時計が、いつ、どのようにしてロシアに出現したのか、サンクト・ペテルブルグに戻つた後、時計はどうなつたのかについて考察することは無駄ではなからう。

「象」時計は、公爵グリゴリー・アレクサンドロヴィチ・ポチヨムキン【エカチエリーナの一〇歳年下の寵臣】の家で行われた祝宴の、言

うなれば、登場人物の一人であった。その祝宴は「一七九一年四月二五日、女帝陛下と殿下の皆さまご列席の下に、サンクト・ペテルブルグの近衛騎兵隊の近くにある公爵の家で行われた。」

ポチヨムキンはまだタヴリーチエスキー宮殿【G・A・ポチヨムキンの屋敷。一七八九年に完成。タヴリーダ宮殿とも】に居を構えるには至っていないが、一刻も早く、女帝への感謝の意を表すため、祝典を催すことを決意した。客は数千人に及んだ。その中の一人に、当時高名な詩人かつ文人で、一七九一年から一七九三年までエカチェリーナ二世の秘書官長であったガブリール・ロマノヴィチ・ジェルジャービン（一七四三―一八一六）がいた。ジェルジャーヴィンは、細かく細部まで取り決められた式典次第の中で、その役割を割り当てられていた時計について、次のように記述している。

「畏れ多くも、偉大なる女帝陛下ならびに殿下の方々に對する祝宴主催側からの願ひにより、また、貴族の名門男女の急使の呼び掛けに従ひ、午後六時までに全員が集まつた。全員が仮面舞踏会用の衣装をまとい、通りは、たぐさんの馬車ですし詰め状態であつたものの、ポチヨムキン邸は、疑いなく、その程度なら、あるいは、場合によつてはもつと多くの客ですらも招き入れることの出来るほどの広さがあつた。ようやく待ちに待つた陛下ご一同の方々が到着した。：深い沈黙、そして、大広間に最初に入つてきた皇族方に向けられる数千もの客の熱い視線、これは最高に心地よい光景だつた。：皇族方が用意された席に着席された、まさにその瞬間、三〇〇名から成る、合唱と楽隊が演奏を始め、音楽がどろき渡つた。莊嚴なハーモニーが大広間いっぱいにあふれた。」

その後、音楽と合唱が大きく響きわたり、カドリールが始まつた。エカチェリーナ二世は、「集まりの場を後になされ、絨毯が敷かれ、高価なタペストリーが張られた部屋で、ご休息に入られた」。女帝は、壁一

面に飾られた、ペルシアの高官アマンとマルドハイ・イズライリチャニンの物語が描かれた絵を眺めていた。隣の部屋で女帝を待つていたのは「真珠の房飾りを掛け、ダイヤモンドとエメラルドで飾られていた金の象だつた。象は鼻を回し始めた。まるで生きているようで、アッスイルの警備兵のところになどと置かれていた。ペルシアの物語がその前で展開した。象の上に座っているペルシア人が鐘を鳴らし、それが芝居が始まる合図だつた。主側が、高貴な来訪者を恭しく芝居に案内し、他の客を招いた。幕が開いた。舞台と演台が光輝く太陽に照らされた。太陽の中央には、緑色の月桂冠にエカチェリーナ二世の頭文字を圖案化したものが輝いていた。農夫と農婦に扮した踊り手たちが登場した。彼らは、光輝く太陽に向かい手を差し伸べ、自分たちの溢れんばかりの思いをその動きで示していた。バレエは音楽と合唱をバックに行われた。」

このように、時計の鐘の音が、ポチヨムキンがバレエと呼んだ出し物の開始を告げたことが、祝宴の記述の中で述べられている。「象」時計は、女帝と高貴な客たちの注意を引き付けるにふさわしいと見なされたことから、祝宴の筋書きの中に組み込まれたのだ。

G・ジェルジャーヴィンの著作集を出版する際、編集を務めたのは、ロシア文学教授でアカデミー会員、一八八九年からロシア帝室科学アカデミー副総裁であつたヤコヴ・カルロヴィチ・グロトであつたが、彼が付した注釈の中に、その時計に関して次のような説明がある。

「その部屋のひとつに、素晴らしい黄金の象がいた。それは、大理石の机の上にある鏡の前に置かれた中くらいの大きさの時計であつた。時計そのものは、小さな宝石がたくさんちりばめられ、上に黒人が座っている小さな象の台座になつていた。」

更にグロトは、この時計はポチヨムキン公爵が、キングストン公妃のかつての財産であつたものから四万二千ルーブルで購入したことを伝え

ている。

「キングストン公妃は旧姓ミス・チャドレイ⁽³⁰⁾、夫との間の奇妙な民事訴訟で、あやうく首を失いかねなかったあの有名な女性である。彼女は長い間サント・ペテルブルグで女帝の下で暮らし、ドレスデンでは未亡人になった選帝侯妃のところに住んでいた。彼女は、二度目にロシアにやって来た時、サント・ペテルブルグの近くに領地を購入し、そこで終生過⁽³¹⁾こした。」

ジェルジャーヴィンは、『第二の隣人によせて』という詩の中で、ポチョムキン公爵の副官で代理人のミハイル・アントノヴィチ・ガルノフスキー（一七六四—一八一〇）について批判的な態度をしているが、その詩の注釈の中でグロトは、公妃に関する次のような補足的情報を付け加えている。「イギリスの公妃キングストンはガルノフスキーに自分の領地を遺贈した。」

よく知られていることだが、「ポチョムキン公爵の代理人ガルノフスキーは、対トルコ戦争時に軍に多額の送金をしたが、このことに関して、誰にも公式報告書を出していなかったことから、その金の不正使用の疑いがかげられた。そして、ポチョムキンに対して好意的ではなかったパーヴェル【エカチェリーナ二世の長子】が帝位に就いた時、要塞に幽閉され、負債弁済のため彼の家は公売にふされた。その後、その家は国庫に入り、近衛騎兵隊の厩舎が置かれた。…後にガルノフスキーの家はイズマイロフスキー連隊とエーゲリ近衛連隊の兵舎となった⁽³²⁾。」

「象」時計は、ポチョムキンの死後にエルミタージュの蒐集品の中に収められた。「エルミタージュ所蔵物品目録」には次のように記されている。

「時計は青銅製で、金メッキが施され、音楽が鳴る仕掛け付きで、全体として、やはり金メッキを施された青銅の凝華に覆われた象の形をし

ている。象には縁飾りの代わりに、糸に通された小さな真珠が飾られている。象の頭には、鎚を手にした中国人が片膝で立ち、真ん中には園亭があり、中に座って球を両肩で支えている人物がいる。紅水晶と白水晶で作られた天幕の上で火花が廻っている。時計の動作装置は金メッキの青銅製で山型に設えてある。文字盤の周りには、水晶と金属板で作られている月桂冠が二つ付いている。その時計の下には、絵とカスケード【段状の滝】の形をした白い水晶の回転体とが付けられた金メッキ青銅製の八角形の箱がある⁽³³⁾。」

壁暖炉用の「象」時計も、エカチェリーナ二世の命で建てられた小エルミタージュの建物の二階に現在では展示されている、誰もがよく知っている「孔雀」時計も、いずれも製作者は、一八世紀イギリスの宝石工芸職人で発明家のジェームス・コックス（一七六〇年代—一七八〇年代）である。「孔雀」時計も「象」時計もポチョムキンがキングストン公妃の代理人であったガルノフスキーから一七八〇年に入手したものである。しかしながら、一七九〇年始めまでは、長い間、それらの時計がサント・ペテルブルグにあることを知る人は少なかった。

ポチョムキンはこれらの時計をエカチェリーナ二世に贈呈しようとしたが、彼が手に入れた時はいずれもばらばらの状態であった。だが、それを復元するという、これほどまでに複雑で責任ある仕事を引き受けようとする職人は一人もいなかった。そこで、ポチョムキンは、ロシアの名工クリビンに頼むしか他になかった。

「お願いだから、クリビン君、私のこの哀れな鳥と象を受け取って、生き返らせて、立たせてやってくれたまえ。そしたら君は誉れと賞賛を受ける【にちがいない】。」

I・P・クリビンは早速仕事に取り掛かり、タヴリーチエスキー宮殿の地下から、二つの時計の部品が無造作に放り込まれている半分壊れた

一〇個の大きな箱と二つの籠を自分が住んでいたヴァシリエフスキー島にある科学アカデミーの建物へ持って行った。彼は、重要な機械部分が足りないことをほとんどすぐに見抜いた。苦心の末、分解し、欠けている部品を復元し、棚毎に、然るべき順序に並べることに成功した。「象」時計の分解はすぐにはできなかったが、大きな「孔雀」時計には、さらにまだ手間が掛かることが予想された。

しかしちょうどその時、クリピンは、G・A・ポチヨムキン公爵からの呼び出しでヤツシイ【モルタヴィア公国の首都】に出掛けることになった。グリピンは、出発に当たり長男に、火事が起きた場合はまず一番に「孔雀」時計を救出することと厳しく言い渡した。一七九一年九月、干し草を積んだ複数の船がネヴァ川で火災を起こした。驚いた息子は慌ててすべての機械装置と部品を闇雲に幾つかの籠に詰め込んだ。それから程なく、ポチヨムキンは他界し、「孔雀」は国家予算でクリピンにより復元された。

ポチヨムキンの死後、「象」時計は一八世紀の末にエルミタージユに移管された。その後その時計は、贈り物として将軍に贈呈するために使節レザノフに渡された。しかし交渉は不首尾に終わり、通商関係は開かれず、贈り物は受け取られることなく、「象」時計はエルミタージユに戻った。時計は一八一七年まで三階のガラスから成る版画用の棚に保管されていた。一八一七年、「象」時計は国の支配者に贈られた。ただし日本ではなく、ペルシアのファテ・アリー・シャー【ファトフ・アリー・シャーと表記することも。ペルシアの地にあったトルコ系イスラム国家であるカジャール朝の第二代君主。この国王以降、同地は英露の暗闘の場所になっている】⁽³⁴⁾であった。

ロシア使節団の長崎出立

三月二三日、奉行の下で初めての会見があり、日本はロシアと通商関係を開く意思はないとの宣言がそこでなされた。翌日もう一度会見があり、以下のことが使節に対して宣言された。

「彼らの皇帝（将軍―クリモフ注）は使節団および贈呈品を受け入れない。その理由は唯一、日本人の習慣ではそれと同一のことを以て返礼するのが当然だからである。しかしそれは不可能である。何となれば、日本人は国外へ出ないこととの祖法が出されてすでに二〇〇年近くになるからである。いかなる民族とも新たに通商を始めることを彼らの祖法が禁じている。日本人たちを彼は謝意を以て受け入れている【ママ】。いかなる外国船も日本の港に來ないようにとの大原則がある以上、ロシアの船もまた然りで、自己の裁量で勝手に受け入れることは出来ない。また、同じく、日本の沿岸に近づくことは何人も許されない。」⁽³⁵⁾

これらのことを述べた後日本側は、乗組員に二ヶ月分の食料を保証する、塩二〇〇〇袋、真綿二〇〇〇個を無償で供与する、長崎に停泊し、艦に必要な様々な船具などを降ろした六ヶ月間の乗組員の扶養分についても負担すると宣言した。それに対する答えとしてレザノフは、ロシア皇帝からの贈呈品、および、使節からの個人的な贈り物を受け取ってほしいと日本人たちに要請した。しかし、彼に対して奉行は次のように言明した。それについては、江戸からの指令がなければ彼らとしては出来ないことである、それには更に少なからぬ時間を要するし、答えは予測出来ない、「何となれば、彼らの法では、外国船は帰さないようにということも規定されているからであり、今回の件は微妙な問題である。」⁽³⁶⁾

使節は、交渉とカムチャツカへの帰港を引き延ばさないことを決意した。⁽³⁶⁾ 以上とは別に、ラトマノフは日記の中で次のことを記している。三月

二六日、「暇乞会见」、「追放会见」と彼が名付けた三回目の会見が終了した時レザノフには、七人の通訳に対してのみ贈り物をする事が許され、「各人にひとつずつの品物で、彼らは翌日それを受け取った。」³⁷贈り物の受け取り拒否について長崎奉行からレザノフに次のような説明がなされた。

「偉大なるロシアの主君は、彼の下に使節と多くの高価な贈り物を寄越された。それらを受け取った場合、日本の皇帝（将軍・クリモフ）は、国の習慣に従い、自分の側から同価値の高価な贈り物を持たせて使節団をロシア皇帝の下へ派遣せざるを得なくなる。しかし、日本の国民および船には日本から離れることへの公式の禁止が存在する。一方、日本は同等の贈呈品の返礼が出来るほど豊かではない。このようにして、日本皇帝は使節も贈り物も受け取ることは不可能である。ここ日本ではそれほどの需要はなく、従って、外国の製品は日本に有益とは成り得ず、過度の奢侈は決して奨励されるべきではない。」³⁸

この後日本当局は、ロシア使節団に、日本の古来からの法に対する敬意と個人的好意の印として日本を離れることを要請し、ロシアの艦に大量の物資を無償で渡した。

「一八〇五年四月六日、ナジェジダ号は六ヶ月余（六ヶ月と十日）の滞在の後、艦に同乗していた四名の日本人を日本政府に引き渡して、日本を後にした。海員たちは日本滞在中はあらゆる必需品の供給を等しく受け、航行に際しては様々な日本の製品と物資を贈られた。ナジェジダ号はカムチャツカに帰港した。」³⁹

このように、大変なる困難を経て日本に運ばれた贈り物は、日本政府に受け取られることはなかった。それゆえ、それらは改めて念入りに梱包され、それから先はナジェジダ号でサンクト・ペテルブルグまで送られた。

このことに関しレザノフは「上奏書」で次のように述べている。

「対日使節団に下付された物品に付きまして、私は、商務大臣殿に目録を送付し、七等文官フォッスに託して詳細な報告書をお送り致しました。七等文官フォッスは、フリーデリッツィ【フリードリッヒ】陸軍少佐と同じく、陛下に対する忠誠心に溢れた然るべき者として派遣され、帰途ナジェジダ号上で物品を管理致しました。両名の苦勞と精勵を陛下に謹んでご報告させて頂きます。」⁴⁰

レザノフは、サンクト・ペテルブルグの高官たちへの贈り物を手ずることに成功した。ラトマノフはその日記の中で、一八〇五年三月二六日、レザノフは、「ロシアのために何の贈り物も持っていないこと」を残念がっており、「特に漆器類の購入がうまくいけばいいが」と言っていたことが記している。レーヴェンシュテルンは日記の中で、レザノフが通商の見本として五〇〇個の漆塗りの煙草入れその他を入手したことを書き留めている。⁴¹

「上奏書」の中でレザノフはアレクサンドル一世に「オランダの代理人商人【ママ】ドゥーフ」の熱意を激励してくれるようお願いした。ドゥーフはロシア人に食糧を供給し「陛下に勉勵を尽くしました。陛下の御慈悲で、ドゥーフに宝石指輪をお送りくださるよう、伏してお願ひ申し上げます。ドゥーフは、必ずや、陛下の御心を格別なる幸せと見なすであります。なにひとつ購入する手だてのない中、ドゥーフは私にいくつかの品物を持たせてくれました。その中から手箱を陛下に献上させて頂きます。さらに彼は、日本とバタビヤの様々な珍しい植物の種をアムステルダムに送付してくれることを約束しました。私が彼にそれを頼みましたが、陛下の御母堂であらせませます皇太后様【パーヴェル一世妃マリヤ・フョードロヴナ】のご依頼によるものです。科学アカデミーのため日本の植物と参考図書も同様です。皇太后様には日本家屋の模型、ま

た、皇后陛下エリザヴェータ・アレクセエヴナ様には書机をお二人のお膝元に伏して、謹んで献上させて頂きます。陛下におかれましては、品物の品質ではなく、精励さに目をお向けいただきたく、お願い申し上げます。これ以上良いものは入手することができませんでした。」

レザノフは、一二月一四日に日誌の中で、書机について次のように書き留めている。

「二四日、書簡に添えて書机が送られて来た。机はミアコ（京都・クリモフ注）で作られたヨーロッパ趣味のもので、黒漆塗り、螺鈿が花が描かれ、銀の錠前が付いている。役人たちは、自分たちがこの机にオランダのお金で五〇〇ターレルを支払ったと言っていた。」

間違いなく、献上した机のことであろう。

最後に付け加えたい。レザノフは少なからぬ言語学的能力の持ち主で、日本語の研究に従事し、入門書、およそ五〇〇語から成る露和小辞典を編纂した。辞典は科学アカデミーから出版された。【ニコライ・レザノフ編著、田中継根編訳「露日辞書・露日会話帳」東北大学東北アジア研究センター「東アジア研究センター叢書第二号」二〇〇一】

●使用文書館文書一覧

1. Архив Военного Константина Адамовича. ОР РНБ. Фонд 152. Опись 1. Единица хранения 155. 31 лп. Вырезка его статьи из журнала «Русская старина»: «Русское посольство в Японию в начале XIX века». 1895 г.
2. Архив Военского К.А. ОР РНБ. Фонд 152. Опись 1. Ед. хр. 379. Япония. Документы и материалы, извлеченные из Государственного и Главного Архивов Министерства Иностранных Дел. 152 лп.
3. Круzenshtern И.Ф. Заметки о плавании “Надежды”//РГА ВМФ. Ф. 14. Оп. 1. Д. 283. 34 лп.
4. [Резанов Николай Петрович], посланник в Японию, действительный

камергер. «Всеподлиннейшее донесение о поездке и пребывании в Японию». Копия первой половины XIX в. Материалы, собранные В.А. Биллябасовым для его работ. Крайние датг. 8 июня 1805 г. ОР РНБ. Фонд 73, ед. хр. 341. 38 лп.

5. [Резанов]. Журнал Путешествия Двора Его Императорского Величества Действительного Камергера Резанова из Камчатки в Японию и обратно в 1804-1805 годах. ОР РНБ. Фонд. 550.

6. Шемелин Ф.И. Журнал первого путешествия россиян вокруг земного шара. - ОР РНБ. Ф. IV. 59/1. 59/2.

●刊行文献

7. Военский К.А. Русское посольство в Японию в начале XIX века (Посольство Резанова в Японию 1803-1805 гг.)/Русская старина. СПб., 1895, No. 7, 10.
8. Державин Г.Р. Описание праздника, бывшего по случаю взятия Исамиды, у Его Светлости Гонодина Генерал - Фельдмаршала и Великого Гетмана Князя Григория Александровича Потемкина Таврического, в присутствии Ее Императорского Величества и Их Императорских Высочеств, в Петербурге в доме близ Конной Гвардии, 1791 года Апреля 28 дня. В Санктпетербурге, с дозволения Указного печатано у И.К. Шнора, 1792 года. 39 с.
9. Известия о путешествиях россиян около света//Лицей. СПб.: И. Мартынов, 1806.
10. Командор. Страницы жизни и деятельности камергера Его Императорского Двора, обер-прокурора Сената, руководителя первой русской кругосветной экспедиции Н.П. Резанова. Составители Авдюков Юрий Павлович, Ольхова Наталья Серафимовна, Суриков Анна Петровна. Научный консультант Быкова Геннадий Федорович. Красноярск: Издательский отдел производственно-издательского комбината “Офсет”, 1995. 704 с.

11. Левенштерн Е. Е. Вокруг света с Иваном Крузенштерном. Составители А.В. Крузенштерн, О.М. Федорова, Т.К. Шафроновская, СПб., 2003.
12. Описание торжеств в доме князя Потемкина//Сочинения Державина с объяснительными примечаниями Я. Грота. СПб.: Изд. Имп. Академии наук, 1864. Т. 1. Стихотворения. Часть I. С. 377-419.
13. Рагманов М.И. “Чтобы лучше цену дать своему Отечеству...”: Первая русская кругосветная экспедиция (1803-1806) в дневниках Макара Рагманова/Составитель О.М. Федорова. СПб.: Крига, 2015. С. 39.
14. Сочинения Державина с объяснительными примечаниями Я. Грота. 2-е академическое издание (без рисунков). В 7 томах. Том первый с портретом Державина. Стихотворения. Часть I. Санктпетербург. В типографии Академии наук (Вас. Остр., 9 лин., No. 12). 1868. 544 с.
15. Шемелин Ф.И. Журнал первого путешествия россиян вокруг земного шара. Ч. 1. СПб., 1816; Ч. 2. СПб., 1818.

● 参考文献

16. Военский К.[Д.] Страна восходящего солнца. Историко-бытовые очерки Японии. (Вышедшего члена русской дипломатической миссии в Токио.) Петроград, 1917. 66 с.
17. Военский К.А. Посольство Резанова в Японию в 1803-1805 гг. на судах первой русской кругосветной экспедиции под начальством Крузенштерна// Морской сборник 1919. No. 1. С. 50-71; No. 2. С. 25-43; No. 3. С. 31-55; No. 4. С. 29-64.
18. Ионина Н.А. Сто великих сокровищ. М.: Вече, 2001. 462 с.
19. Рагманов М.И. “Чтобы лучше цену дать своему Отечеству...”: Первая русская кругосветная экспедиция (1803-1806) в дневниках Макара Рагманова/Составитель О.М. Федорова. СПб.: Крига, 2015. С. 39.

【註】

- (1) Рукописный отдел Российской национальной библиотеки (далее-РО РНБ). Фонд 73, ед. хр. 341. Лл. 1-1 об.
- (2) Журнал Шемелина. Фонд 550, Ф. IV. 59/1, Л. 1.
- (3) Первая русская кругосветная экспедиция (1803-1806) в дневниках Макара Рагманова/Составитель О.М. Федорова. СПб.: Крига, 2015. С. 39.
- (4) Там же. С. 39.
- (5) 一ノムンノ【五ノムンノ】の表の単位は】歩一歩ご相違一ノムンノ・一ノムン
- (6) Военский К.А. Посольство Резанова в Японию в 1803-1805 гг. на судах первой русской кругосветной экспедиции под начальством Крузенштерна// Морской сборник 1919. No. 1. С. 67-68; “Командор”. Страницы жизни и деятельности камергера Его Императорского Двора, обер-прокурора Сената, руководителя первой русской кругосветной экспедиции Н.П. Резанова. Составители Авдюков Юрий Павлович, Ольхова Наталья Серафимовна, Суриkin Анна Петровна. Научный консультант Рыкова Геннадий Федорович. Красноярск: Издательский отдел производственно-издательского комбината “Офсет”, 1995. С. 14-15; Левенштерн Е.Е. Вокруг света с Иваном Крузенштерном. Составители А.В. Крузенштерн, О.М. Федорова, Т.К. Шафроновская, СПб., 2003. С. 215; Шемелин Ф.И. Журнал первого путешествия россиян вокруг земного шара. Ч. 2. СПб., 1818. С. 103.
- (7) Цит. по “Командор”. С. 16.
- (8) ナシエジタ号は六〇、八二六ループル、ネヴァ号は六八、四三〇ループルで、それぞれ購入。
- (9) Путешествие. Известия о путешествиях россиян около света//Липей. Периодическое издание Ивана Мартынова, на 1806 год. Часть четвертая, книжка вторая. В Санктпетербурге в Императорской Типографии. 1806. С дозволения Санктпетербургского Цензурного Комитета. С. 45-47.
- (10) ОР РНБ. Фонд 152. Опись 1. Единица хранения 155. Лл. 9 об - 10.

- (11) Левинштерн Е.Е. Вокруг света с Иваном Крузенштерном. Составители А.В. Крузенштерн, О.М. Федорова, Т.К. Шафроновская, СПб., 2003.. С. 19.
- (12) Резанов. Журнал. ОР РНБ. Л. 9 об.
- (13) РО РНБ. Архив Военского Константина Адамовича. Фонд 152. Опись 1. Единица хранения 155. Л. 21.
- (14) Там же. Л. 18.
- (15) 「バンシモース【Банжос】」とは、おざらへ、日本語の「弁事」（支配人、役人）をロシア人たちがさう言っていたものと思われる。【banjoost(蘭語)】。長崎のオランダ人が日本の役人と呼んだ言い方（シーボルト「江戸参府紀行」）。「筆頭バンシモース」はOrrebanjoostのロシア語訳と音写の組み合わせと思われる。以下、「上級」「下級」との形容詞の付かないBanjosを役人としておく。本稿筆者が地の文で「役人」とした場合はこの言葉が使われているわけではなく「 чиновники」が使われているが、あえて訳「分けてゝなる」]
- (16) Там же. Дл. 20-20 об.
- (17) Журнал Резанова. Л. 26 об.
- (18) Там же. Л. 32.
- (19) Там же. Л. 52.
- (20) Там же. Л. 52 об.
- (21) Там же. Л. 52 об.
- (22) Там же. Л. 54 об.
- (23) Там же. Дл. 57, 57 об., 58.
- (24) ОР РНБ. Архив Военского К.А. Фонд 152. Опись 1. Единица хранения 379. Япония. Документы и материалы, извлеченные из Государственного и Главного Архивов Министерства Иностранных Дел. Л. 15.
- (25) ОР РНБ. Архив Военского К.А. Фонд 152. Опись 1. Единица хранения 379. Япония. Документы и материалы, извлеченные из Государственного и Главного Архивов Министерства Иностранных Дел. Л. 17.
- (26) Там же. Л. 17 об.
- (27) Шемелин Ф.И. Журнал первого путешествия россиян вокруг Земного шара. СПб., Т. 2. 1818. С. 62-63.
- (28) Левинштерн, 2003. С. 215.
- (29) Левинштерн, 2003. С. 223.
- (30) Эриксенс・チャムレー (Elizabeth Chadleigh)「結婚後はElizabeth Pieteroni「キングストン公妃（一七二〇—一七八八）。一八世紀イギリスの恋多き女性」重婚罪で起訴された。
- (31) Сочинения Державина. Т. 1. СПб., 1868. С. 291-292.
- (32) Сочинения Державина. Т. 1. СПб., 1868. С. 313-314.
- (33) Ионина Н.А. Узак. соч. С. 350.
- (34) Ионина Н.А. Сто великих сокровищ. М.: Вече, 2009. С. 351.
- (35) [Резанов Николай Петрович.] Всеподданнейшее донесение о поездке и пребывании в Японии. Д. 17-17 об.
- (36) Там же. Дл. 18-18 об.
- (37) Рагманов, 2015. С. 340.
- (38) [Резанов Николай Петрович.] Всеподданнейшее донесение о поездке и пребывании в Японии. Д. л.【17-17】. Эта же часть донесения приведена в книге известного (ныне полуглазубого, проработавшего в молодые годы пять в русском посольстве в Токио) революционного историка:【報告(シ)の部分には有名な(今では半分忘れられた、また、若い時東京のロシア大使館に五年間勤務した)革命前の歴史家の次の著書の中に引用されている】Военский К. Страна восходящего солнца. Историко-бытовые очерки Японии. (Бывшего члена русской дипломатической миссии в Токио). Петроград, 1917. С. 50-51; Путешествие. Известие о путешествиях России//Линей. Часть четвертая, книжка вторая. СПб., 1806. С. 55.【有名な革命前の歴史家」として紹介されたヴォエンスキーには次のものがある。ヴォエンスキー(堀竹雄抄訳)「一九世紀初年日本に於けるロシア使節(一八〇三—一八〇五)レザノフ日本派遣」『史学雑誌』一九一三、四、七、一九〇八】
- (39) Путешествие. Известие о путешествиях России//Линей. Часть четвертая, книжка вторая. СПб., 1806. С. 55-56.

- (40) [Резанов Николай Петрович.] Всепоходнейшее донесение о поездке и пребывании в Японии. Л. 36 об.
- (41) Левенштерн, 2003. С. 257.
- (42) [Резанов Николай Петрович.] Всепоходнейшее донесение о поездке и пребывании в Японии. Лл. 25 об - 26.
- (43) Журнал Резанова. Л. 60.
- (44) Военский К.[А.] Страна восходящего солнца. Историко-Бытовые очерки Японии. (Вышего члена русской дипломатической миссии в Токио). Петроград, 1917. С. 49.

(翻訳：有泉和子)

【 】内は訳注。